

教科等研究会（小・中学校特別支援教育部会）

令和元年度 研究活動のまとめ

1 研究テーマ

子どもの姿から出発する「分かる・できる」「楽しい」授業づくり
～一人ひとりの教育的ニーズに応じた授業づくりの工夫～

2 研究経過

| | 期 日 | 場 所 | 授業者、内容等 |
|-----|-------------|---------------------------------|--|
| 第1回 | 5 / 23 (半日) | 甲佐小 | 研究テーマ決定、年間計画、組織作り (参加者74名) |
| 第2回 | 8 / 2 (全日) | きつずびあ他 熊東園 (益城町) 益城中央小 | 放課後デイサービス きつずびあ・ぴあすまいる (益城町) 施設見学 障がい者支援施設「熊東園」(益城町)施設見学 実践発表 広安西小 岩下 陽平教諭 講話 熊本はばたき高等支援学校 中満 隆志 教諭 班別交流会 (参加者72名) |
| 第3回 | 12 / 3 (半日) | 益城中央小 | 実践発表 木山中 和田講師 津森小 木村教諭 上土井教諭 益城中央小 青木講師 和田教諭 柳木教諭 淵上教諭 大倉講師 藤原講師 小田教諭 安竹教諭 班別交流会 (参加者63名) |
| 第4回 | 1 / 23 (半日) | 広安小 | 研究授業 嘉島西小 井上 莉菜 教諭 自立活動「自分がかせになるう」 年間反省 (参加者90名) |

3 研究の概要

(1) 研究の内容

①研究テーマについて

今年度、特別支援教育部会では、昨年度と同じく「子どもの姿から出発する『分かる・できる』『楽しい』授業づくり～一人ひとりの教育的ニーズに応じた授業づくりの工夫～」というテーマで研究を進めてきた。

特別支援教育の完全実施から12年目を迎え、児童・生徒の教育的ニーズも多様化している。子どものありのままの姿から、教材を工夫し「分かる・できる」「楽しい」授業づくりをしていくことこそ特別支援教育の根幹であると考えている。また、学齢期の今、授業づくりを工夫し、一人ひとりの実態や教育的ニーズに応じた支援方法を模索していくことが児童・生徒の将来の自立へ向けての重要な第一歩となると考える。

そこで、令和元年度においても、昨年度同様、全体研究テーマの一部を部会の研究テーマとし、サブテーマを「一人ひとりの教育的ニーズに応じた授業づくりの工夫」として、子どもたちの実態をどのように捉え、そこからどのように授業をつくり上げていくかということに視点を当てて研究を進めていくこととした。

今年度の部会員は90名を超えて総勢95名。大所帯ではあるが、部会長と理事長を2名ずつ置き、会場を分けるなど会員の分散化を図ることができた。できるだけ会員のニーズに応えた研究会にするべく、地区理事や研究部を中心に研究会の充実・深化を図った。同時に、協議の内容を工夫するなどして、それぞれの授業実践等を紹介する機会を多く持つこととした。

②研究の実際

研究授業及び授業研究会を2回実施し、夏季休業中の1回については、全日研修として施設見学と講師を招聘しての研修を実施した。

ア 第2回 全日研修 施設訪問及び講師招聘による講話

今年度は、施設訪問と講話、班別交流会を計画し、全日研修を行った。午前、二カ所に分かれて熊東園(益城町)と放課後デイサービスきつずびあ等(益城町)を訪問した。成人された当事者の方の生活や作業の様子を見たり、放課後デイサービスでの支援の様子を見たりすることで、支援の連続性の重要性や今、できる支援内容を考え直すことができた。

また、午後は、岩下教諭(広安西小学校)より、熊本県特別支援教育研究会夏季研修会で

の「自立活動部会」発表リハーサルを行った。その後、今年度開校の熊本はばたき高等支援学校より中満先生においでいただき、講話を行った。上益城郡にも近い高等支援学校の開設ということで興味深いお話を聞くことができた。講話の内容については事前に会員にアンケートを行い、会員の悩みやニーズに応じた話をお願いした。日頃じっくり学ぶことが難しい内容について詳しく見聞きすることができ大変有意義であった。また、会の最後に班に分かれて情報交換を行った。この班別交流会は、それぞれ担任している学級種別に編成したこともあり、会員に大変好評であった。各自研修の中身を自分が担任している児童・生徒と重ね合わせ2学期からの実践へとつなげることができた。

イ 第3回 実践発表 木山中学校 津森小学校 益城中央小学校

木山中校区の3校で各学級種別（肢体不自由、病弱、難聴、知的障がい、自閉症・情緒障がい、通級指導教室）での実践報告を5つの分科会形式で行い、11名の先生が実践発表を行った。発表された先生方にとっても実践をまとめ発表することで確かなスキルアップにつながった。また、それぞれの分科会に分かれて少人数で実践に学び、情報交換を行ったので、活発な質疑や意見が出され、中身の濃い研究会となった。

ウ 第4回 研究授業及び授業研究会

嘉島西小 井上莉菜 教諭 自立活動「自分はかせになろう」

（概要については、「4 実践事例」にて紹介）

(2) 成果と課題

- テーマをもとに、それぞれの会員が児童・生徒の実態とニーズをもとに今つきたい力を考えた授業のあり方や支援方法について、より実践的に学ぶことができた。
- 町単位で授業研究会を受け持ち、事前研なども町ごとで運営をお願いした。司会、記録なども分担して授業者を支えるように組織化することで会員の意欲も高まり、授業内容に深まりが見られた。
- 少人数で具体的な実践例を出し合うことにより、様々な支援の可能性について話し合うことができた。班別編成も障がい種別や学年で分けたり、経験豊富な先生にリーダーをお願いしたりして、互いに悩みを相談できる場とした。
- 夏休みを利用した一日研修は、長期休業でなければできない施設見学や児童・生徒の将来に関わる就労や福祉について学べたことは有意義であった。来年度もぜひ、施設見学をしたいとの声が多数あった。日程調整が難しいが、早めに日時を決定・連絡するなどしてできるだけ多くの会員が参加できるよう工夫していきたい。
- 今年度も、支援学校から研究会に参加いただき、助言を頂いた。理事長からも特別支援学校の研究発表会や研修会などについても紹介し参加を促した。今後もさらなる連携を進めたい。
- 90名を超える大所帯の研究会ではあるが、早めに会場を押さえて計画を立てていくことで、よりスムーズに運営することができた。部会長と理事長を二人ずつ置くことで分散開催が可能となり、施設訪問や研究授業が実施しやすかった。小中連携という意味では一緒に開催することも大事だが、来年度も会によって分散開催を行っていきたいと考える。

4 実践事例

(1) 授業の概要

嘉島西小学校自閉症・情緒障害学級での自立活動の実践。担任されている児童のうち3年生男児1名への取組を紹介された。参観者が多いため、あらかじめ授業の様子をDVDに収めて、それを視聴する形で授業研究会を行った。

《授業の視点》

自分自身の成長を感じとることができたとき、児童の「わかった・できた」につながるのではないかと考える。また、友だちの良さを認め合ったり、自分の良いところを実感し伸ばしたりすることで「楽しい」につながるのではないかと考える。本単元は、子どもたちの実態は、もちろん、「友だちと仲良く遊びたい。」「気持ちを落ち着けたい。」という、子どもたちの思いから出発した授業である。この授業を通して、授業や生活の中で、自分ができるようになったことを実感したり、自分や友だちの良いところを認めたりできるようにしたい。

《授業者自評》

- ・「自分はかせになろう」「イライラが少なくなるように」をテーマに授業をした。
- ・【評価について】本児はとても関心を持って参加した。これまでの学習を振り返り、その方法をしっかり考えることが出来ていた。

・【よかったこと】思った以上に興味を持って参加してくれた。考えを出してくれた。他のアプローチの仕方も考えていたが、事前研でアドバイスをもらい、子どもの思考に合わせてスムーズになるように考え直した。

・【改善点】

①ご褒美タイムの確保が出来なかった。目の体操などで時間を掛けすぎてしまった。たくさん方法を考え出したので、思った以上に時間がかかった。

②分類の仕方について 学校で・家でと2つに分類したが、「両方で出来る」が必要であった。その場で分類の仕方を変更しても良かったかもしれない。

③教師の話をする事でイライラ解消のレパトリーを広げようと思っていたが、あまり出すことが出来なかった。どうしても伝えなかったことは伝えたが、「もっと考えたい」という感想があったので、もう一時間使って考えさせ、教師側からも提示していく時間をとりたい。

《全体協議》

・イライラの原因には違いがあり、内容や程度によってどの方法がよいかを考えるとよい。交流学級の子ども達にも協力をお願いすると良い。「自分がかせ」は良いネーミングだと思った。

・自分の困り感からスタートしたことがとても良かった。客観的に自分のことを考えており、出来ることを分類したのも良かった。今後の発展として、本当にイライラしていたときにたくさん考えたやり方を精選していくこと、これが有効であったなどの結果を広めていくとよい。対人関係のトラブルが多い児童もいる。予防策と「こんなときはどうすればよかったらう」などの思考が出来ていくと良い。

・視覚的に流れが分かりやすい。いろんなやり方を提案しているのが良かった。短冊などの用具、とても有効であった。真剣に子どもが考えることができていた。

・自分のイライラの視覚化としてメーターを作ったことがあった。周りの児童への指導として「責めない」「そっとさせる」などの方法を教える。「気持ちのコントロールが苦手」と伝え、みんなへのお願いとして「ふわふわ言葉で伝えて欲しい」「褒めてあげて欲しい」「静かにしてほしい」と指導してきた。

・主題にあった、教師の思いに沿った活動が出来ていた。子どももたくさん考えを出した。ご褒美タイムがなくても十分なレベルだった。丁寧な取り組みを続けていく。セルフエスティームは一人で作れるものではないので、周りから認められることで高まっていく。導入の前段階として、児童の困り感、先生の理解がしっかり合っていた。カームルームなどの環境を整える、用件を頼む、等のイライラ原因の解消に繋がる。中学校では暴力に繋がるため、小学校の頃からの継続的な取り組みが重要である。

・考え方の偏り、正義感の強さからくる問題もあるので、クールダウンの後が重要。同じようなことがあったとき、考え方次第で行動が変わってくる。考え方に幅を持たせるという視点が良い。こういう考え方をすることで自分が楽になるという体験をすることが大事である。

《助言 松橋西支援学校 古閑先生》

授業について。自分のことを肯定的に捉えられるようになって欲しい、という教師の思いが出ていたから、子どもが安心していたし、信頼していると感じた。自評でもあったが、児童は「できそうだな」という思いを持ったからこそ「もっと考えたい」と感じたと思う。楽しかったこと・イライラしたこと、段階をつけて示されたのが良かった。このイライラについてはこの方法で・・・という風に視覚化して残していくと良い。日常生活の具体的な場面で使えたときに、今回の学習を繰り返し活用していけると良い。

他の児童と一緒に考えることの良さもある。普段友達がどんなことを考えているのかを知ることで、共感することもある。みんなに平等に発言する、批判はしないなどのルールを明確にしておくことで、意見を出し合いやすくなるのではないか。

《助言 松橋東支援学校 甲斐先生》

自立活動をしっかり活用したいが時間設定が難しいという悩みに関しては、それぞれの学校でより良い方法を考えていくことが大事。たとえば、総合、学活などの時間は調整出来るかもしれない。子どもの実態に応じる必要がある。道徳と絡めてSSTを盛り込めることもあると思う。集団・個別双方の良さを活用する。自立活動は学校生活全体でやること、教科などにしっかりと位置づけながら進めていくこと大事。「気づきノート」を使うところもある。目標にあった活動をしていけるようにしたい。自立活動の内容は、生活や学習の課題への学びを交流学級で生かせるようにしていく。職員間の連携、個別の支援計画で誰が何をするのかなどの位置づけが必要である。交流学級での広がりも考えると、UD化という視点で、交流学級にも

広めていけるようにしていきたい。支援学級の在籍児童、増えている。先生達の困り感を聞く機会が少なくなっているが、通級などとの連携も始まっている。訪問教育もスタートしている。医療福祉と繋いでいくことが出来るので、気軽に連絡して欲しい。

(2) 学習指導案

自立活動 「自分がかせになろう」

井上 莉菜 教諭（嘉島西小学校）

① 単元について

本単元では、自己分析を行い、どういったときにイライラしやすく、どうすれば解消できるのか考えることで、児童にとって困難な状況下でも、自分の気持ちをコントロールして行動できる素地を築くことを目指す。また、自己分析により、自分には不得意なことだけでなく、得意なこともあることを実感させることを目指す。ひいては、児童の自己肯定感を高めることができるようにしたい。

② 単元の目標

- ・自己分析を行い、苦手なことだけでなく、得意なことや良いところもあることを知ることができる。
- ・これまでの経験を振り返り、イライラしやすい場面を段階で分けることができる。
- ・これまでの経験を振り返り、イライラが少なくなる方法を考えることができる。
- ・学級の友だちの得意な面や、頑張っていることを知り、互いに褒めたり認めたりすることができる。

③ 本時の学習

ア 本時の展開

- (1) 目標
これまでの学習や経験を振り返り、イライラが少なくなる方法を考えることができる。

(2) 展開

| 過程 | 時間 | 学習活動 | 指導上の留意点(○)評価 | 備考 |
|--------------|----|---|--|------------------------------------|
| か 課題をつかむ | 10 | 1 あいさつをする。 2 本時の流れを知る。 3 眼の体操を行う。 ①めのストレッチ ②タングラム ③ぼうパズル ④生き物タッチ 4 めあてを確認する。 | ○本時の流れを示し、視覚的に流れを確認できるようにする。 ○眼の疲れを防ぐとともに、眼を使うこと意識できるように、はじめに眼のストレッチを行う。 ○見本を正確にとらえることができるよう、見本の形や棒の長さをしっかり見るように声掛けを行う。 | タングラム パズル 絵カード ワークシート |
| し しっかり考える | 25 | 5 前時の学習を思い出す。 6 イライラが少なくなる方法を考える。 7 イライラが少なくなる方法を「家でできること」と「学校でできること」に分ける。 | ○前時でどのような学習をしたか問い、前時の内容を思い出させるようにする。必要に応じて前時のワークシートで復習を行う。 ○考えることが難しいときは、前時のワークシートを活用して振り返らせる。 ○教師がイライラしたときの対処方法も伝えることである。児童のイライラが少なくなる方法とレパートリーを増やそうできるようにする。 ○イライラが少なくなる方法を「家でできること」と「学校でできること」の二つに分け、具体的に実践する場面をイメージさせることで、般化につながるようにする。 | 前時のワークシート (必要に応じて) 短冊 |
| ま まとめる | 10 | 7 今日の活動の自己評価を行う。 8 ごほうびタイム 9 あいさつをする。 | ○めあての確認を行い、めあてに対する評価を行うことができた方法のなかで、今後しようと思ったことを、般化につなげる。 ○児童の得意な活動を授業の終わりに行い、落ち着いた気持ちで授業を終えることができるようにする。 | ワークシート 折り紙 鉛筆 |